



Title	イラン・ヴァルザネに生きる人々の生態史 ーザーヤンデルード下流域における生業を通じた重層的な資源管理と利用
Author(s)	西川, 優花
Citation	大阪大学, 2020, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/76334">https://hdl.handle.net/11094/76334</a>
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 論文内容の要旨

氏名 ( 西川 優花 )

## 論文題名

イラン・ヴァルザネに生きる人々の生態史  
—ザーヤンデルード下流域における生業を通じた重層的な資源管理と利用

## 論文内容の要旨

ユーラシア乾燥地帯では、1999-2002年にかけて大規模な旱魃が生じ、それにより各国において甚大な被害が生じた。本研究で対象とするイランにおいても、その旱魃を起点として、環境移民の発生や農業従事者の失業、それに留まらず都市における水不足や水質悪化など水をめぐる様々な問題が噴出してきており、いまや水の問題は国家の安全保障をも揺るがす最重要課題として位置付けられている。本研究で対象としたザーヤンデルード川最下流に位置するヴァルザネも、特に2000年以降現在に至るまでのおよそ20年にわたり旱魃の問題に苛まれ続け、人々は対応を迫られてきた。

イランでは特に1979年のイラン・イスラム革命、1980-1989年のイラン・イラク戦争、2003年の対イラン経済制裁の発動により、現状を詳細に知ることのできるデータや研究が顕著に不足している状況にある。それにも関わらず、限られたデータや事例をもとに、現在イランに差し迫っている水をめぐる問題に対処をしようとしているのが現状であり、今一度、人びとの生業と生活の側から旱魃を捉え、その対策について検討してゆく研究が求められている。

本研究では、イラン中央高原を貫流するザーヤンデルードという内陸河川的最下流に位置するヴァルザネという地域社会に生きる人びとを対象とし、そこに生きる・生きた人々の語りから生態史—ある社会・人間の空間や自然に対する関係の通時的記録(秋道2011)—を作成することを通じて、乾燥地に存在する農村地域に生きる人びとの生活史を、歴史・社会・生態的文脈に再配置しながら通時的に解釈してゆくことを試みた。つまり本研究では通時性を重視し、ヴァルザネというミクロな環境における人間と自然との関わりへの応答について焦点を当てつつ、この関わりへの応答としての生態史を国家や国際社会のなかで位置づけなおすことを射程とした。また、イラン農村地域におけるミクロの事例に基づく研究の空白を克服すべく、本研究では現在の時空における生業と生活を把握するための参与観察をはじめとする質的調査のみならず、ライフヒストリー調査を行なうことでその空白を補完し、現在のイラン農村に生きる人々の営みを、これまでのイラン農村研究の蓄積に接続させることを試みた。また、本研究の目指す生態史は、自然・人間・社会との関わりへの応答を客観的な事実の痕跡として記録し分析してゆくことを目指すものではなく、イラン農村研究の開拓者である大野(1969など)が模索し続けた農民理解を、現代イランの時空において達成しようとしたものである。

第3章では、本研究において対象とするヴァルザネが属する水系である内陸河川ザーヤンデルードについて、河川の歴史的な利用と開発について整理を行い、ザーヤンデルードをめぐって歴史的に水分配をめぐる権力の恣意性と抗議活動とが存在してきたことを確認し、本研究において主眼とするヴァルザネを流域全体のなかで捉え直した。河川上流域と対比させたことにより、周縁化されて来た存在としての下流域の存在が浮かび上がって来た。その上で、ヴァルザネが2000年以降苛まれている長期的な旱魃の影響について、現地調査の結果をもとに特に基盤生業である農業について整理したところ、河川からの配水が激減しており、地下水位の急激な低下を招いていることが明らかになった。

第4章では、第3章にて整理を行なった流域の開発と利用との歴史的経緯を踏まえつつ、本稿の冒頭で「もともと私たちのものである」と古老が述べたザーヤンデルードの水利権をめぐる所有論について、これまで先行研究で報告されてきたカナート灌漑の農村の事例と河川灌漑の農村とを対比・援用させながら分析を行った。河川灌漑の農村における所有論を踏まえ、内陸河川であるザーヤンデルードがこれまで誰のものとしてきたのかを明らかにした。特にヴァルザネを含む最下流の配水地区における水分配の論理について分析を行った結果、ザーヤンデルードをめぐっては、河川全体を共有物として扱う視点と、流域に存在するそれぞれの受益村内における水利権者達とその村内において共

有物として扱う視点が闘ぎ合って存在することが明らかになり、その視点の重なり合いと、流域全体における所有論の連なりを描き出す重要性が確認された。また、ヴァルザネにおける水利慣行が河川の性質と不可分であるために、カナート灌漑の農村と比して固有な状況とも言う、共同性の継承の現状が導かれた。その上で、ヴァルザネにおいて水が「共有物」として扱われるその理由について分析を行ったが、その共的实践の要となるミーラーブ(水番)に着目し、その役割と機能を明らかにすることで、ミーラーブを通じて共同性の確認と継承とが行われていることが見えてきた。

続く第5章では、イラン農村研究において議論の中心に据えて検討されることのなかった生業複合に焦点を当てた。ヴァルザネにおいて観察される諸生業が、そこに生きる一人ひとりによってどのように営まれ、早魃と乾燥という生態的な条件に歴史的にどのように対応してきたのか、そして2000年以降の長期的な早魃に対してどのように対応しているのかを、ライフヒストリー調査によって、生業を営む人びとの視点から明らかにした。調査から、ヴァルザネに存在するそれぞれの耕作地の所有の変遷を明らかにした。耕作地の所有の変遷からは、ヴァルザネが1960年代の農地改革の時点ではその政策の影響を受けておらず、むしろ1979年の革命以降、農村聖戦復興隊の活動によって農地の拡大や分配が行われ、当時目された「自立経済」の達成のため農業を営むことが促進されてきたことが見えてきた。また、かつてのヴァルザネにおける河川とのかかわりが現在に比べて多元的であったことが見えてきた。さらに、2000年以降の長期的早魃下で諸生業を複合的に扱い早魃に対応しようとする人びとの営みが明らかになっただけでなく、それぞれの生業が重層的関係にあり、河川との関わりが過去から多元的であったこと、現在も多元的であることが導き出された。

第6章では、第4章の河川をめぐる所有論および、第5章において明らかになった河川と生業・生活との歴史的・重層的な関わりを踏まえつつ、さらに踏み込んでヴァルザネの人びとによる早魃や水利権、河川の水をめぐる認識について分析・解釈を行なった。彼らにとって早魃とは、何よりも「川から水が来ないこと」であり、早魃をめぐる意味内容も、時系列が降りるに従って地下水の減少や景観の変化などが加えられて語られた。また、ヴァルザネの人びとが早魃について説明する際に、明確に理由を説明する場合には常にダムや上流の人びととの対比を持って語られ、その対比の中で規範性が確認されていることも指摘された。さらに、日常の場面において語られる水をめぐる言説と、抗議行動において語られた水利権をめぐる言説とを、ペルシア語に即して精査した。それにより、「私たちの水利権」として表象されるヴァルザネの人びとにとっての水利権の射程を明確にした。彼らにとっての水利権とは、水利権所有者のみでなく、若者や景観などを包摂するものであることが示唆され、その正当性の根拠としてはヴァルザネの歴史性のみならず、記憶の限りに存在する河川水を得るために払った犠牲や労力とが挙げられた。一方、河川の水をめぐる言説からは、抗議行動を通じて水の問題を解決しようと身を賭す傍ら、究極的には河川に水が来るかどうかについてを、人為・人智を超えたものとして認識する人びとの姿と思想が導き出された。

現在のザーヤンデルドをめぐる長期的な早魃は、イラン社会全体の人口増加や、生活様式の変更による一人当たりの水消費量の増加など、人為的な要因と降雨量の減少、早魃年の継続などの自然要因とが絡まり合っている。そのほかにもグローバルなレベルにおける気候変動の影響も指摘されているものの、それらの諸要因について人為と自然とを区別することは不可能であるし無意味でさえある。ヴァルザネの人びとが認識する早魃の要因とは「ダム」であり「上流域に暮らす人びと」である。そしてこの「ダム」や「上流域」とは、現代イランにおいて構造的に作り出されてきた権力と差異とを象徴するものであると言え、ヴァルザネにおける長期的な早魃は、少なくともヴァルザネの人々にとって、人によって作られた早魃として受け止められていることを指摘できよう。つまり、社会的に構築された苦しみ (Kleinman1997)がそこには存在すると言える。一方、ヴァルザネではそのような認識を持ち抗議行動を行いつつも、この早魃には人為や人智を超えた意味があるとし、その意味を見極めようとしながら今も河川下流域で日々を生活している人びとがいる。この態度は、上述の「ダム」や「上流域」を早魃の要因として理解しようとする態度と決して矛盾するものでなく、自然と人間とを対峙させるのではなく人間の行為の因果の先に神智を見極めようとしているのである。そして、この二つの態度の闘ぎ合いのなかにこそ、本研究において捉えようとした「現在のヴァルザネに生きる人びとにとっての生態(=風土)」の姿が現れているのではないだろうか。

## 論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 ( 西 川 優 花 )	
	(職) 氏 名
論文審査担当者	主 査 教 授 三好 恵真子
	副 査 准教授 小林 清治
	副 査 教 授 白川 千尋
	副 査 外部審査委員 鈴木 均

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、イラン中央高原乾燥地域を貫流する内陸河川ザーヤンデルード川下流域に位置し、800年以上生業である農業が成立し得た地方農村都市ヴァルザネを対象とし、そこに暮らす人びとの生業・生活からそこに息づく生態史を明らかにすることを試みる領域横断的な秀作である。生活実践や表象に関する記録がほとんど存在しない中で、約5年間に跨がる長期的な参与観察・ライフヒストリー調査を積み重ねることにより、人々が生きる空間の複合的な現実を捉えつつも、その風土が形成されるに至る人間と自然の関わりを歴史的射程から丁寧に捉え、認識論的視座より包括的にまとめ上げている。総じて、ヴァルザネというイラン乾燥地に存在する地域社会に生きる・生きた人々の語りを重ねつつ社会・人間の空間や自然に対する関係の通時的記録を描写することにより、そこに生きる人々の生活史を、歴史・社会・生態的文脈に再配置し重層的に再解釈しうることを試みた野心的論考として高く評価される。

従来、イランの農村地域研究において、特に日本人研究者による堅実で細密なフィールドでの実績が、世界の先端として評価されてきた。ただし、イランのここ50年あまりにおける情勢の不安定化が影響し、水不足が深刻化している2000年以降の実情を知ることでできるデータや研究が顕著に不足している。他方で、2000年以降はイラン人や欧米研究者によって水問題を扱う研究がなされているものの、既存の学問領域からしばしば部分的に論じられるに留まり、そこに生きる人々の生業や水を巡る意味とその変容などを十分に解き明かすには限界性が見られる。そこで本論文では、現在の生業と生活を把握するための参与観察のみならず、そこに暮らす人びとのライフヒストリー調査を包摂することにより、上述の研究上の空白を補完した上で、日本のイラン農村研究者たちが模索し続けた農民理解を現代イランの時空において達成しようとするものであり、学説史上も極めて貴重な調査研究として位置づけられるであろう。

本論文は、序章から結論までの7つの章により構成されている。序章に続く第2章では、コモンズや生態史に関する諸理論を渉猟した上で、特に自然と人間との不即不離の関わりを重視する関連理論などを深く参照しながら、既存の課題を克服すべく本研究の方法論を明確化している。第3章では、内陸河川ザーヤンデルードの歴史的な利用と開発について整理することにより、徐々に周縁化されていったヴァルザネの姿を掬い上げ、またそれが直面している長期的な早魃の要因とその影響をイラン社会のなかで読み解く重要性につなげている。第4章では、特にヴァルザネを含む最下流の配水地区における水分配の論理について分析することにより、ザーヤンデルードを巡り闘ぎ合っている存在する視点の重なりと、流域全体における所有論の連なるの詳細を描いている。またカナート灌漑の農村とは異なる共同性の継承の現状を導いた上で、その共的实践の要となるミーラーブ(水番)に着目し、ミーラーブを通じて共同性の確認と継承とが行われていることを見いだす。第5章は、イラン農村研究においてこれまで議論の中心に据えられなかった生業複合に焦点を当てながら、ライフヒストリー調査より、かつてのヴァルザネにおける河川との関わり並びに2000年以降の長期的早魃下で早魃に応答しつつ諸生業が複合されている重層的關係性の展開を捉え直し、今なお河川との関わりが多面的であることを導いている。さらに第6章では、水をめぐる管理と利用の実践の現場や、抗議行動において語られた水や水利権をめぐる言説をペルシャ語に即して精査することで、ヴァルザネにおける水をめぐる所有観のみならず、彼らにとって河川流域に生きることの世界観をも描き出すことに成功している。それゆえに、ヴァルザネの人々は、自然と人間とを対峙させるのではなく、人間の行為の因果の先に神知を見極めようとしている姿が人々の生活史の内に刻み込まれ、この二つの態度の闘ぎ合いのなかにこそ、本論文にて捉えようとする「現在のヴァルザネに生きる人びとにとっての生態(=風土)」の姿が現れていると結論づけている。

以上のように本研究は、イラン農村研究における研究上の空白期を見事に補完する貴重性に加え、人間と自然の関わり合いの中にある水の価値というものを、近代的な観念である「権利」という形で扱うのみならず、その土地に生きる人々が自然との関わりの中で人々の精神文化の基礎として今日まで脈々と伝承されてきたこと、そして人間の生をまっとうするためにも、重要で欠くべからざるものであることを人々の認識や自然思想から導き出していることは、先行研究を超越しうる価値を放つ。翻って、ヴァルザネの人々にとって、水の存在は人間の精神文化の基盤であり、今日まで伝承されてきた文化が自然と人間のかかわりの重層性により形成されてきたゆえに、現在のヴァルザネが直面する水危機そのものが、人間の精神的拠りどころを確実に揺らがせているという、この社会的に構築された苦しみに向き合うことの重要性も紐解いた論考は、十分に説得力を持ち、他の追従を許さぬ貴重な成果に仕上がっている。

以上論文審査の結果、本論文は、博士(人間科学)の学位授与を授与するのに相応しいものと判定するに至った。